

2014年  
6月13日  
金曜日

本郷 亮 教授（経済学史）

# 洪沢栄一『論語と算盤』

今日の日本では道徳が混沌とした状況にある。何を信じるか、何に価値を置くかが定まりにくい。あえて言えば、最も普及している道徳観・価値観は、「良い就職」ないし「高い年収」だろう。私も含めて多くの人は、人生の前半期には、漠然とこれらをめざして競争し（受験競争・出世競争）、そして人生の後半期にはこれらによって人を評価しがちである。小学校から大学までの、ときには塾や予備校も含む、長きにわたる教育が、ひとえに「職のため」「金のため」だとすれば、それに役立つ無理に学ばされることは、単なる苦行でしかない。「自分は何のために勉強してきたのだろう」という疑問を感じるのも当然である。

現代日本には、このような広い意味での「拝金主義」の過熱を制御で

きるほどに強力な道徳観は、残念ながら大学の中にさえ僅かしか残存しないように思う。経済学部の教員の一人として、私は自分の無力さを痛感する。リーマン・ショックのような資本主義の暴走を引き起こしたのもまた、道徳なき経済至上主義だった。けっして容易なことではないが、私は健全な市場経済の発展のために、道徳と経済の結びつきを回復しなければならぬと信じている。

洪沢栄一（一八四〇―一九三一）の『論語と算盤』（一九一六）は、そのタイトルが示す通り、まさに道徳と経済（富）の両立を論じたものである。洪沢は近代日本の実業界・財界のリーダーの一人であり、わが国の銀行制度の整備に尽力したほか、四〇〇を超える会社の設立に関わり、近代的会社制度の発展にも大貢献した。そうしたことから、彼は

「日本資本主義の父」と言われることもある。実際、明治以降のわが国の近代史を学べば、彼の名があらゆることに登場することに気付くだろう。

わが国では武士道的価値観の影響もあり、金銭は卑しいものであるという考えが根強かった。しかしそれは偏った考えであり、金銭自体は悪でも善でもない。それが悪になるか善になるかは、その持ち主の行動次第である。ここで言う行動とは、①その貨幣をどんな方法で手に入れたか、②その貨幣を何に使うか、の2つであり、この2種類の行動の中にその人の貨幣的「人格」が如実に表れてくる。金銭を醜いものにした美しいものにしたりするの、この①②によって顕示される人間の行動なのである。今なお金銭が卑しいものと見られているとすれば、それは

金銭所有者の行動が卑しいものと見られているからだ。

洪沢の『論語と算盤』は、道徳と富の両立のために、以上のような金銭所有者の責任を強調している。現代日本は世界屈指のGDPを誇っているが、その膨大な所得を生みだしたり消費したりする中で、一体どれほどの人々が憎みあい、苦しみ、そして「負け組」と呼ばれて蔑まれ、合法的に抑圧されてきたことだろう。わが国のGDPは数字の上では尊敬に値するが、前述の①②の観点から見ても尊敬に値するか否かは、はなはだ疑問であるように思う。経済を倫理的に尊敬しない者が、はたして経済学を尊敬できるのか。倫理的には醜い学問でも、「職のため」「金のため」には役立つので我慢して学ぼうという姿勢では、あまりにも悲しい。